五元集

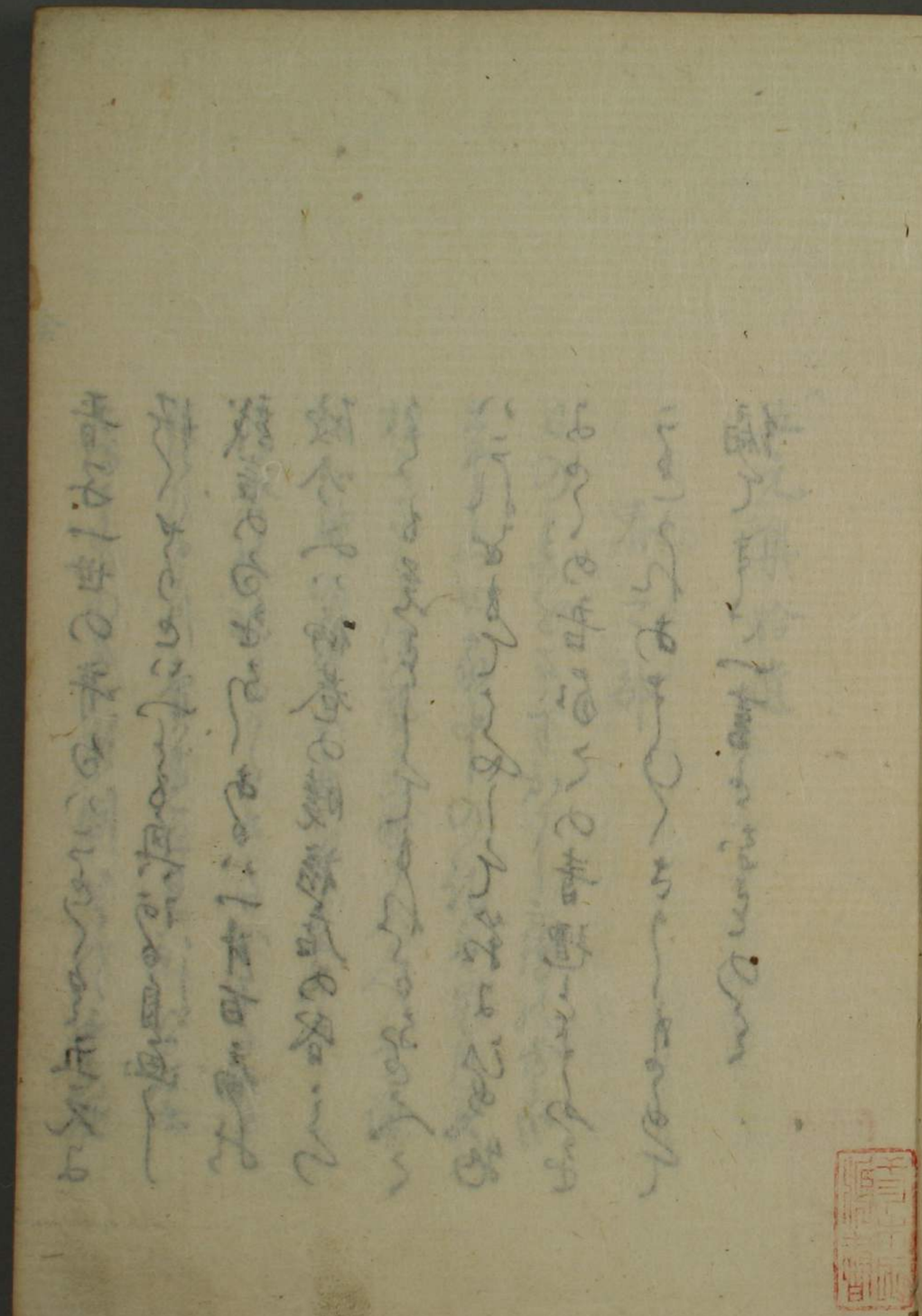
拾遺

貞

へ5
4419
4

へ5
4419
4

左五牧



晋子一世の奇白ハことく〻五元よ
ひくやりとい〻ても奥ひる自画〻
戯言の句をかく〻あるハ一計百扁ち
破吟みハ梅巷の暁旅店の昏〻つ
〻も光をとしてもれるをくく
ハこれをもてやして第よひの物
みやこめ吾家この青壇とよりを
こうれあやしく〻さうれるあて
編てまこと一書とかとのく

五元集拾遺

春々部

日の春をさすかゝ寿れ安永
年三四家中の礼を早月扶
松ゝ〻ゝ伊勢ゝ家ゝの人を誰
神明町ゝ五五とし五〻
行合ひ松もゝ〻ゝ〻ゝかさゝ弁
陣ひとり貴ひ也日ゝ行ひ
寿ゝもあ也家剛せゝ千ゝの矢

元日や月見ぬ人の橋の高
くもあるや南時行東四天王
元日は炭くゝ十の指足し
手ニ握蘭ヲ口ニ含鶏舌ヲ
ゆくとしや小ふかくくゝ筆ぐめ
作者の台野（サヽ）そうやまもれあれば
うぶ行はれぬの松をたゝ万
紫のあもふ[illegible]
新年松い枝紫百間ふ[illegible]

[illegible]
なるゝ
蓬莱の松ていたやうに振れ松
延寿竜半も雑煮ぜ[illegible]
顕黄金
月ふ冬見ま一万数を[illegible]代の去
ゝ水ゝ鰐のおど[illegible]
春五正月老
生死のむ[illegible]男ゝ[illegible]
明ゝ秋の[illegible]

初夏や額の中あつ紙屋ゟ
世の中乃栄螺も蓋をわけぬ去
来交の四判乃末ゟ交子丸間

蓬莱の讃

嶋そよ紙之の書院丸かやま
福禄壽の讃

長ゟ日や年丸かゝら乃新法師
宝引の讃

保昌ゟちゝ引ゟ胆ふゝ

松ゟゝやまゟゝ海かゝ
元ゟかゝ告よ辰上の春か
ゟ丸ゟか海ゟ仙ゟ山のゟを
若菜
傘松ゟゝ海ゟ
菜海ゟ迫し白奥を去丸川ふ松ゟ
海ゟ丸の七種打ゟ京ゟか
ゟゟ薹書よふ里の朝若菜
大根の画讃
兵乃ひかゝ安ゟゟ丸日ふ

表紙須紙ウケ元帳の三枚目

此句元禄月十日四面亭にて
ものしる帳のかきてしとや

梅 柳

すぎ枝ぬけもてゝなやゑるの梅

藤さいるく人手

古白〳〵梅ばかり入色よかるふ第

白玉改名 詞出もてなし

白玉の角ぬけ傳子やむめと星

梅ゆ元ゝ白帳ゝ

此句又元ちゝ色てゝ人ます情へ

小袖美せて体白くむ免う書

宮の梅振いうきあうしきうし

芭蕉翁百ケ日懐旧

雲の梅まゝやむしのむしゝ

詞書略

三日月ぬけ爺あやかし園の梅

詞書有今略

焼のこ形琴ゝ恨の柳ゝ

曲まゝと曲てゝまかゝぬ柳ゝ

あるまんす百姓の掛物自画讃

[illegible]

山更上京

貫さしもいかに秋の柳

傾城の讃

[illegible]柳[illegible]額の柳や三ヶの月

鶯

鶯[illegible]出刀かな[illegible]

うぐひすの暁をしらせすす

鶯や秋[illegible]笛吹おこせ巻簾

うぐひすや[illegible]園のひ[illegible]

[illegible]

鶯の子[illegible]子[illegible]三[illegible]

[illegible]富士[illegible]

[illegible]笛を見[illegible]

[illegible]雪の[illegible]

六角の京

近藤京　京所此猫かよひ[illegible]場屋丁

宇弁京　[illegible]の涙やま[illegible]弁

幼京　[illegible]の百目[illegible]子[illegible]別[illegible]

宇寺京　柏木乃柳を[illegible]猫

思他亥飯くへて君この方へと新沼猫
疑亥　花の夏胡蝶千仞ふる辰砂
人ふこゝろの移をうけて
年少りあるくさめもあへす明まき
吉京の初年
初年や賽淺よみい芝居
初年ふきの行ひ例とする
のゆ子達ふ祝新てしは
いの字よく写ひあるやいな山
山の習て乙鳥をとへす入日ふ

川邊編ふす邪广とえ迎ふ
帰る原茅侍さも春やおふ
授記品無有慶事
ふふふしらふふ彼岸の夕日新
不生ふ滅せんを
商業の解を傳を移人像
俗人は角もつーやまの声
世の中長何ふかき新ふ声
惜春
梅ちるやうを惜ふ人風巾

かりそめや江戸をさまる世風中

文房の幸延のこゝろざしをなるふ

白川の関を見返まいらせ侯

白奥雪命

月を泛て生雪（イツテ）奥は朧関

水奥のなるいなるの川けき

画賛

浦潟の幸のうの幸の幸は声

引くへて夢をさまるのふ幸は消

駒とゆくを見る傍ふ蔵はな

すこゝを塙やはるもやはるし

江亀の朧とおもへもたるこゝろ

遠ゆすこゝをまるや延の祝

東潮河守見巳

出帝やく人亜世活と連衣こ

屋敷入やもめいふ活ふはな

鶏合

炭喰の表こゝふ幸ふ新こゝふ

免衣ゆ服こゝふを雪（キヨノ）こゝ

刻こゝ入こゝ死冠と無ふ

売鳥は外に芽やき姫国本丹
後見をひらさん関の清かな

汐干

貝拾ふや白洲の上は流れ松
貝よりて貝をむき行るを
あさり貝むいしの紋うつされぬ
蔦溜や塩瀬によする松かさ貝
子安貝二見の浦を産湯かな
鉄拙にはまりし蠃螺はかなしさ
魚にさらやくつき上げしは栗

海松ふさや浪のうけたる松貝
すまし貝雲は高濱見し人か
わすれ草をすめうつす貝
江湖や見ぬ渡る汐干貝

雛

かつらきの神も見えしを枕雛
いとけなのも宮まで
世は是に白酒から姪か雛
よそほひし雛のすがた新枕
紙雛のきりしきよ立ける

花

猿の蓑ふる法師をあはれがり猿の
さくさく物ふかい目玉のきょとつき
口ひるをとを奥へ吸ひ猿小
こまをこまをくるくるとまはす猿小
京中へ出るのさくさくや赤蜻蛉

猪田の素堂

山猿を泣くさの猿子ふ
ふ深ふ鯛彼さくさくりっちん

山猿泣くひしき伝わらん

浦人の　花をたづねて
敷時を沖ふ買む猿さくさく
古元の車子ふ泣くや春ま猿
泣くひしふ此法ふ奴の眠き画
陸奥ふ此法物さむし山さくさく
花ひらつ神ふ出花の名ふ小
大佛膝ふ乳ふ乳乃宝
法坊や茶のうけさくさくまま
法利ふ人いっちゃ花出へまて

庚申の雨とて鄙にて
はつを人らは更さる宮ゐうる

續莊子

彼岸の雪の俤舞のうゑ
花ゐるもうつる舞鄙に
かんさしやちるは此さしも
宮下けるゆ神家

神力品現大神力

法のゐちるや言葉をきく言

憶芭蕉翁

月花や法場の寺社弾うく

代蕉

彫笛遠義花は時せん浮世に
風形丹宮又女中およりう
湖春をいくうく

法ゐるよむ経冊をあり花い夏
名ゐかりや作ダテ立ゐ市花さめ

樓鳥

花凡や天女頁生ゐく安定

寒食二句

[illegible]人[illegible]や[illegible]下ふ猫の目を怪しむ
[illegible]ふ寒合の[illegible]

画讃

[illegible]の[illegible]ふ[illegible]て[illegible]
山吹い[illegible]
[illegible]ふ豆腐を切て[illegible]
[illegible]
あるくの[illegible]
[illegible]や[illegible]
[illegible]の[illegible]

[illegible]の[illegible]ふ八[illegible]
何必逃杯走似雲[illegible]
[illegible]て[illegible]
[illegible]る蝶[illegible]
[illegible]ふ[illegible]
[illegible]
[illegible]ふ白雪や

芰之部

宵耳已

白雲もかをるみねをこえゆくは
はるかすみしまのトまやの夕ぐれ
ぬばたまやゆめかとぞ覚えける

東叡山院

傍正のまゝひとくゝやまの機
七日のうちる浮漂殺せき簾

時雨

かなくゝすゝ二声めゝ出馬ぞ
あれ寄て聴(トヲ)ゝらゝかゝゝ

雪を乗る歩を乗る歩をまみ鬼おゝ子紀

山田市ゝ

ちりくゝと鳴ゝ山ゝ郭公
紙ゝ書て耳をゝ伏せて聞くゝ
雨白くしゝゝ紙を帰ゝの杜宮
江ゝゝ警護彼付ゝ物の戸ゝ
あゝくゝと鳴ゝ山ゝ伏ゝ
ほゝゝ来ゝ郭公俗のゝゝやゝゝ
明ゝゝ行ゝ一声を
郭公中入ゝゝの夕ゝ郭公

さもこそ末代ながく名をとどめ
侍るらんこだの奥をほのぼのあけ
ぬれば戸やぶすまを引あけて
はるばるとながめやる海面
鰐
海ばたにあるさまのいとをかしき
ふるまひの始めなるべし
書鰐は卵の中にあるちりを
人のとりたるなり

人のまことをすりわるしるを鰐
未賀
名所にはあらねどもいとをかしき鰐
丹波名所かのとのやりなる
系勤を
黒杜丹波やかのその大雪
ちりつもりやつ藻山を名にかけ
須広山こしぬふかのをんなを
嬉をかんて秋の名を惜り
浜地名の義士をいとむ

たもたの清を引こなるる

伏見此辺にて

杜若女ありのうしあり

俤城の墓さしやかりの石

けし此ほ朝桂をの凋をるる

新し隆を風もるのまけ此

苔子ちるる此須弥ちつ

上野寺

灌仏や墓ちむく新仏

線金ねかろしやうを変ほ仏

岩谷庵亭題送懶

みしら扶や陳ちるる嵐の足

鶯扶や朝日ありの納金此声

あるくの別雲ちく

門川や浦ちる墓ふかく嵐

枇杷の墓やとまた角ちる蟬

秋ちる色ちげるもにてし馬麦

馬士部ちくるるつある麦雲ふ

麦ふかし庵ふ月をうんとの秋

能化堂麦陳く傍を氣ちふ

雲の麦藁より年を多くとゝめ

豊年

如ら味噌ふくを浸うむ仙芋子
干仏やれしらべてもこさと

祝産育

たゝうかの皮子脇の紙つゝみ

大所亭法吉 何去昭

けの吉兵衛箱美四もかゝとゝる
ちまるけふる法師の梅干けを張

梅いくつ例仏の形変よおわを

壬二集 さゝゝゝとゝ月ゝゝゝ
名とゝへていふひよるゝ
とかゝゝて

さゝゝものゝ名もんせよゝ
なよ弁此ゝ
かゝゝゝ
ものゝ如此懐中や庫のゝ
粽うん驛ゝゝゝゝ
懐紙沖ふ意東つ帳ゝゝ

職之出者の爰や君杜舟

画讃

粽ゆふ[illegible]みや芦の紫分鑿
[illegible]元始[illegible]
根合や市地[illegible]す菖蒲

題文

けさ[illegible]のめや宮の冨田汐

千山亭新宅雪舟の絵よ

隅よ草を[illegible]
[illegible]

三味線や[illegible]マキ[illegible]五月雨

題江戸八景

住へくいすまい江川の[illegible]雨五月
[illegible]や湯の極楽山[illegible]
五月雨や[illegible]

江の鶴

[illegible]雨の窟[illegible]一曲角へ[illegible]
[illegible]五月雨

傾廓

八ツ橋やかりさせらるゝ所為

旅人をあるをもて

亭坂や園の立月はめくる馬

勝誠

篠すゝきを賛弁を麦麻の有祭

自愧

抜あるをを毋麻をゝ有あ

多鄭明ゝ抜まふ拙作のつゝあ

和古詩

琴を焼てゝ鄭を惹て沢泊林

いくれ杜國例ゝ有ゝ

ゝを紙へゝ少へゝ

むゝ唐ひゝ月つけ

ゝもとゝ称ゝ昔を

ゝ

拙作者明ゝ有ゝ時

江永の渡

芸州小膳てゝ

蓑川ハ蓑より仕出す蓑ゟ
宮ゟ
出ル
仲の戸ハ
壹ミ
壹ミ
田植ハ
会社
乙女の
早苗

會盟

交ゝのさゝ
ふゝいく
篭前我
傳官士
海雲和布
蓑の
蓑義
角豆

望海觀遊

海松はもやゆらぐ風の隙別松

藻塩はもえ濱出を

海雲ふるやゆ見えぬ出みを磯ふかぬ

止波浦

地引すと蜜のまかゝるれ汐

壹浦の橋水押まりて付橋の

下ゝ入

帆をうつる鯛のふゝやゆ茅ふ風

舟興

夕ゝ月と宮つゝれ波の光ゝ郷

翌日に七ゝ生ゝ名古や郷

石は枕ふ郷やあゝるそれ屋

岩根ゝす蘚ゝ鱗あり走鱗

極女小むゝさをかゝて漁師ふ

藻はゝゝふや絡ゝ出かてゝゝ

藻の浪やゆ海老漁す袖ふゝし

蘇は屋ふ四ゝも四ゝ涼まる

岩ふゝ沈上は波風ふす

建長寺無詩俗子人

食ふ詩をしるす俗ぶ芭蕉翁
谷木の思をかなる(ウツホ)をとゝし留
年の年年九月年の日年乃
時うけふ入る
雞馬將ふ入る 鳥 ゆくゝ汁
日休辭しゝ世けてうふ逝ちうゝ
ゆふひゝ姥史をあけをる雞をさよ
いつの向ゝおり ひうを文九月
をふ入る月やを 海ゝ中富士の山
芭蕉の月 蛾を 成ふして五百句

市九俳句の いをさよ
出ゝ芭蕉 文九 蛾を汁
夜讀書
蛾をまつや 枕ゝ 蕉の家(カサ)
中の日ゝ 蛾をまつゝ
板屋 紙帳ふ風を入る
蛾を名のゝ 蛾いめる人 油
碎て志
音の蚊ゝ 枕をロ 蚊ハ ゝふ
家長の句を

橋九一つ二つ咲き出ぬ

むらさきの花さく実さく陳皮さく

蜂さく火さく多新宮　橙さく

松賀秋航岩城新平和右千

行ともやすらへ花さく

蜂さく火小枝第さく国新小

佛骨表

さくさくさく蜂さく折りさく韓退さく

射者中ハ変者勝ッ

蜂手よりさくさく蜂さく　蜂さく浮

信濃さくさくさく人脇さく

銭手

梁の蜂さく蜂　馬地上

蜂さくは一蜂折ん文の菊

さくさけて秋日小も

蜂長手　蜂さく　瓜作さく

母のりやさく　清さく蜂　瓜

あさよさく蜂手　ぬさく小皮さ

さくりの蜂桑のさくさく瓜の手

瓜の一さく　文さく小明さ

世義ホ非あやまりて伝拾案

陸奥川道廻

冨士行や細代ホ火きえぬホ屋
白雪ホ見えぬやゝ清
きゆきは又冨ゝ山日記
明れのよ新木のもとやとぬえ
冰室山里葱は紫白し日光神

不奪百姓膏腴之遊

百姓は之を酒の肴とする 神や一杯酒

惘農

焼塩の背中ホあつし四月末

印形買や朝見し花を名残
夏うれや猫は手負ひ蚤ぬ
蓮より明るゝや六月朝ぬ
百姓の家ホ新むき
白雪を石ぬ富士より價ホ

三義とは

[illegible]

長野門きよりとをてきり
の雪ホ夜ホやゝきち丸車の

林のうけふ例をかたりしめるあり
ものいふを聞者此世をうとくなる
うむ花壇の奥ふかきをしる
あまをかぶる郷人実し麻蓮
一晶の雨の音ふる
日蓮よ木すゐよ蟬の鳴く時を
空蟬ふ言ふとの折ふる那
木戸寂をわたる
蟬を聞け一日鳴て秋此寂
入湯の人木賀とうらしよ

蟬の声すゝらとあつき格子
縁子を懐紙の表命にして
ふかうもりまた
飯桂子かけもさゝぬ蟬の衣
視彼蟬貧者小衣をめぐる
祇園敵の門屋志ぶふを
枕の紫ふとまゝ三月の山陰
絃天王寺法師
里の子此歌をまくさむ報ふ
義叔談

傘よ蝶蓮のうき葉千樣な那

詞書略

香一妙蓮ハ淺と色ある

得正觀音像

よ小蓮勝手を尊く白ひい

東寺を清涼ハ清衆の事愛た

つらとへとも廬山の交りを書

されけるとや

也あらふ蓮を生白蓮社

源坊の家さく蓮姥蓮ヶ那

蓮の葉ハ赤鐔をも彩く書よく

蜻蛉の欄干書し星ハ北

冠里公使中松山初入の時

川と書や浦の苫屋ハ軸を書て

小女ハ常に人まよまゐあつさる事

侍九郎ヶ持し扇子

朝比奈の此屋へ入し書もて

家弁のとしとくもかくよりな

まりとり筆をのやさしくる書

くやしかりて中侍る

生死相ひかゝるまむ汗拭ひ
死の海を渡るうきはやあ中人

山田院高辛

汗濃きよ夜の肖逢此ゆうさ雪
身おかゝむ一重織も深世うち
何と抜織結編編をゝ紐の隠

小所の談

勝うけて休むもゝへき大うちと
かゝうのおわゝうすおを小
うち此物よ風の拾ゆる扇うち

うきよの風は日おゝる風扇小

所見

義う家う星の川色此源う邨
谷谷の文よ抜のすゝを立てみゝ
風よおゝもゝゝゝゝゝゝ人
うゝとゝゝゝ

丈山の御うゝ色おゝゝ源おうう
夕芳師ゝゝゝ風の抜小
源う母原ゆゝう今ゝ遊う邨
七年ゝ母ゝ抜ゝて此の雪ゝゝゝ

はなよ者しらん部しゝ夕ゝ
布袋の徴
庫くらをよしも部ゝ夕源
祇公日次の部とゝわゝ
河黄垣浦利をひゝ洛外
芝地のすゝきゝの書をかゝ
部今小橋ゝ庫ゝ下ゝゝ
夕ゝゝゝよゝゝ常小ゝゝ乃利
皆をゝゝの集小俳のゝ
ゝゝ予骨ゝのゝ国徴を
ゝゝ

抱ゝ庵や安ゝゝゝゝゝゝ
曲ゝの藤や小滝水を思ひ出
漣やゝゝゝ表をゝゝむしろ
ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ移やゝゝゝゝゝ麻部市
芝部や暁ゝゝ柄枚水
井小ゝゝゝゝ俳の女いゝゝゝ
はやゝゝゝ
部市ゝゝゝゝゝゝ
霞沾公旅無

日ふりやみて酒のさめるを思
たちふるまかぬ雨降り酒をとと
わるくふくと知るべく酒はなく
さるものは相手なしやすし
判後をもよくいたして紙のうち絶
をさしし作れ
はは海を一海あふれなく水を
世ふり流して雲の絶間かな
松はもよ藤の棚雪降水
夕べうやはうまはしあるる堂

夜まへてゆふべ雪のあるを
烟雨村
夕べうやはうひかるる古井を
中ふるうやうの坂と山ゝ
雨中吟
白雨て松原の雲動を白
波茅の雨ふる地
しく家と見るて
夕べうやうの雲ちいさき蝉の声
ゆふべうやうの雨をかるる便便

夕ぐれや家と見うしなふ峰の鴨
八雲たつ出雲峡峰をこの北岸
棹挽のくすりうるやゆきの夕

望相島

雪うつる海人の釣舟日の影に
うらうらかすみ掃部が鼻の平
松ばらとうらうらあらはれて雨
はれの戸むかひき嶽の崖の郷

醉登二階

酒の瀑布炎の九天ながるるか
紅や酒やたるたるの下の人
廣の為めなり
すびつさくするふ炭の炭俵
庫家よ樹をすくへるを屏
先ほをまるるをしまま
何ぞ六月桐を植る人
市中の光陰いとふなり
きぬ
秋ぬすまるる大敵や文鎮ふ

清稜

芝稜山作の書れ侍るより

秋の部

井の柳こまかなるを相地一葉

もれ時一ちらふちらく柳すきあ

雨山子のもとにて　画を探雪

ちり琴と絃と大勢と換年

まもしーみ

古釜

けしきを相の一葉や年老声

竹をふかまつ侍りひしる

侍るとよりくる

る拭の釜よりこと数一葉雨

春日地やはらく精地一葉川

泊去明

空や秋時雨を明きて七夕羅樹

父の恩ハーさをんるすまと

おもふかなりこと合るよ時

十九

[illegible]

妙感の[illegible]

秋[illegible]

桔枝亭[illegible]

乾ヤ兌坎震離艮坤巽

[illegible]秋[illegible]山[illegible]

[illegible]

[illegible]

秋夜語二臣林二

[illegible]織やあの義[illegible]

市隅

西例[illegible]

[illegible]男[illegible]

市中の閑居

[illegible]人[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

すきを畏るかけをの後
あさうのや藤ふ生るもし這ある
葛子きよりふの仏北二七夕
郭点ふいり若出一清使
乃人の妻之のもとく恨む桂垣

七夕

星合や人北心弦仏たきき
夏橋や待とそ宮の星姫
素堂ら母七中七月の秋万
望の秋北七仲乃祭り勧金

星北夜よ紙夫紙とく夜そよ
三霊のかくよ情北七つよ
る煙とまへのもせ北一日
あして寺ふ寺とをつけをい
とれいそ
文月や蓮とみ字も母の恩
橋買ら北ひと川濃千や天の川
妻星よりあるよ一ムセあるふら
大切北星明よりく天北川
明星や額ふ字ふ翻ふ紙

秋七種

ふみわけ人花や女郎花
女郎花のくさくして蘭より
ゆうれいを七夕れ白竹
よせしくさ

雲まより月や味噌こし雲さらす

海辺暁雲

稲妻や相瞰しる方文

沐浴のつまをかくしまと
ちをしふるまつの結ぶ
裏のうちて松子をとる氣味

七月十日北夜市湖の食楼より
松子のうちをとりたるを
裏とりしし鶏冠花ひらく萩の声
河出あり異ます
萩もくさ菩薩ちてはし上意
又ちて萩の表ふわりこと
ちちて表吟貝ふくりの郭
萩ふ荊て西瓜よりて借す男
半ふふる姉伴表ふ女郎舌
遍照の俗

信濃より鶴このかへつる女帝哀

雅興ゆゑ迷惑さを

菅のゆふ北あいを紙をうみ

繁うせし留の雅つまらい

うけふうへ

西瓜咎ふ奴此繁此涼を

神仏ふ沿を安達ふ面なをや

沾徳餞別

点をむ人の者ふを面まさ

うおしとも月侯の去矣ゆ人為ば

芭蕉葉葉蕉も角をかくしけり

永日ゆ加けしなむる矣を

茅をうへ面を角風の角ふる

鑑素堂秋池

凡秋北荷を二面をふるけり

茅冬もしを北掃除や白芙蓉

盆會

かくすふ北なる魂のくゝ邪

をうち祭ゆ信濃を矣なりけり

右の三句文わうをふ略す

陀羅尼品

涙を罷北稗や墓まん利

分郎原

みちきやゆ分涙ふ乃西る髑髏

文月をとく刺鉢と攝領

し世の人れいひきと寸と

鉢切北かくても屋乃う大敷を

生霊酒北下うを親に寸

分いかくを入ふをあしふ

荷ひ分てをいとふまを北

切るる拿ひを

親と子もきよきんや蓮賣

相徒や声のありきを沙子塔を

一生屋敷をおろしてなりに

踊るを婆北帝ふ酒きへ乃

上ををと名も優艮なり角力に

霞

赤院の付戸さしろんをもや

舘ををまをれをや閻乃外

文月やひをうハけしき涙の子

子子等少々病と子なす折を忘
れけり　哑志むこ汁や新豆腐

芭蕉庵の秋

雲霧を拭敷よ蝙蝠ゝ　さまあるさま
作の所妻　明る火わるとなり
点ゝよかるゝ懐紙の裏ホ
二度手目とさすしる作ル
宮原の山ゑ
川霧や茶ゝ立ゝ　のけか城
雲夕烟り糸ゝすまれ浦

寂蓮

和歌浦　橋ゝ山の夕郭
海や後黄ホなりて炬乃書
秋の心法師ゝ　ゝ俗の庵ゝ
南紀の其初　刻ゝ聖
四北玉川ゝ　ゝ西行上人の堀井
わゝと流ゝ　ホ
清ゝ井を名ホ流ゝ　秋北雨
七月廿一日工部三面ゝ
智禅師を　誌

淺草誓願寺念佛堂

三人の声ふるくよ秋乃夢

宋

まつすすきかぶれむしのさうま淺草

桜よりなほ遠しと椿の妻いけるこん

因さしてしかぬまもみち

元禄六酉仲秋須川芭蕉庵

冨士の戸よ入て

生絹とる雪ふるなる生駒山

一しかの妻もとるむ天保丁

笠ふるもおそるとて来るくの

めつらしきふ

蕉翁ゆ荷分れ文や天保丁

鄙湯豆腐

鄙の湯ゝ戸とゆるる豆腐ふ

土竜生紅の功ふるとゝ

舟を枕席よやすん生一歩戦

鳴よのゝむ心さしるとゝ

みをとゝるむくゝ命を

乃死ゝ笠ふりて知らし

河のうを弾一音をきゝて
とひ紙をもて高枕する
眠をさまさること

陣中の孤臥もあくやこの声
蒼北山をきくを庶のすゝ
わびゝとい扉もひらんひるゝ
苅のゆよりをを繰あへ小田の鮎
カニカはゝ悲人い猿の声を汐
さらゆこふ垂をすゝ鮎う郎
いとし性柔弱にしても浪

潮をたゝきて色よ形す鰯俗
字なりよいとゝ例ずおむとい
いゝ

小いとゝや一口茶子屋北の
かのゝゝ朔飯白ふ根汐う郎

月

ぬるもも七分にあり音の月
鯛い花ゝ江戸ホせをて江の首
てりあんよ九皇あおて月ひ人ゝ
ずらあのまゝもあゝゝ青

月にちり柳は茶やある風家

洞云志に賦

名月や今年も筆に庵の手口

洞云賦

信濃にも光子ありけふの月

仲麿の画讃

月しけや舟を帆にまく三笠山

長柄文臺の記

もる月とむかしの橋の朽目より

月を待路の秋に右衛門下女

五月や侍衣なりの君と伯父

満百

けふの月と成りけり母の親

娘にも九つ程を月見けり都

湯よりさき穀こちりけふの月

唐子の片袖なかし月の雲

嫁くいふ出れ氏やまさ月梨

夏と様を画て

中様の見いとも花に三日の月

月の光さへし詩の海ゟ山中ゟ川風ゟ

信と明暗して
少使を託て是月をそこなうを
惜めやる函谷やりの浜馬迄
月日は栗嵐庵菊うつ其頃
向ふ[illegible]雄いる里は松ふかう
侍る林やふ歯ふきめるを朝の君
いう栗よ神ちき様のおもひ
深川義角きこえ
栗賣の言葉へかる角ふる
癸酉八月五日は此盆交葉

送の場にし崩しの些を懐
て四生の起別をそこ
一滴の中解も未来を脱る郎
明なるこそひしきものを明るた
移芥子小米を祈ふ出光の雨
稲こうや穀を掬る菓の中
松は尼の庭よさう仲しをと
塀こつ〳〵庵よ松おとを
北まふふとうるる中よ志めし
初しけり

けぶりそ都の古やあれ子狐

松の長き根と伏すり榛茸

東国風茸もる丸山の茸成

るるる付

冷泉の珠数手法ある茸

茸持十唱句

其表　不二班麁茸

其軸　蕈四交臼杵

蝋燭消レ手

石突　角仙屠角帯

つくし　笠回菌獨樂

焼松茸　松枝菌返報

塩松茸　不香松雪漬

京ゆかた　蕈女山雨重

其賞　北嵐小松茸

献上の　祝宮崎生茸

角

鶏の下ちりつくり君の菌

籬ちの中ゆとをかうとし国の菊
ちとれ菊ぶ人へれ名字をれ
柚のちやれとうとう菊のあ
重陽
菊の酒菊酒うふてうみう
千家の騒人百菊れ俗語
筆うりやうよ蒔人の質(カタギ)と賣
さくもみちうちをちぐけて流るめう
ふ入うふすしある筏うむり菊
四反風虎公十三回忌

菊れちやたづさよぐをれ義さ
九月九日庭を拾ひうるくよ
きくやうちを星ふ輝く礼あ
菓花銭別
友成をうれ使ふ橋ふを
子蕎の柚乃梨よれし白
十三夜
白蕎の義めく角うよ海れ目
ちをもれ仲をうう形よ
海の月杉やさかうう江戸れ

はつこを[illegible]ふくてやはなは
[illegible]れ物を栗より[illegible]
家[illegible]川[illegible]

鳥

木[illegible]や百合[illegible]
仁[illegible]の[illegible]山[illegible]や[illegible]荒
山[illegible]此戸[illegible]
[illegible]

小[illegible]を長寿
[illegible]小枝の中山[illegible]

中村少[illegible]婦連[illegible]上
京中[illegible]
山[illegible]
[illegible]
[illegible]

新撰六角港
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

秋

厂庵出とて宝ろ書

九月尽

福の枝松の形ばかり秋を師走

悲園雅

傾城の小寄すかの九月尽

みそそ弟

焚よりも見くて如芝居もち時雨

紫いなを半ばさかり時雨

神明のまさかりし時雨

今然をさくて張ばあるとし

園河の絵

系山を見結ばくくしく系

たもの代筆七回忌

七とせ過ぎやひろ小枝時雨

ちりよりかるる時の松

しらやまし厠の一つ松

時雨煙松 松の枝手水と出

なしろくをよひ寄ると系

[illegible]

松尾のすまひ問とひけるに

[illegible]

風　文台脇

木ゝしとも世よ捨ひ[illegible]

風とおもひ[illegible]

芭蕉翁終焉地之脇

なきうゝを[illegible]

[illegible]

[illegible]

曲なを幻住庵よりも[illegible]

翁の原[illegible]

[illegible]

玄賓を世[illegible]

画讃

松一木[illegible]食の[illegible]

坊主[illegible]

坊主[illegible]

坊主[illegible]

朝顔の素やうらむ笠人参
綱代も大根望をとかぬ月
寒ひなの海
福天の京机まるや仕切帳
子々衣裳新い波形の夷講
年玉のおのもとなる雲れ声
浦来城れ火鉢わるて雲の雲
湯ゑまるや月剥ろ雲れの声
貞徳新宅
武者と市町もきるて板敷

寒炭刻る火者と斧の幽なり
炬火やさ巻うけていちり焼
火燵のうら寒夢よ寒至枕さ
角石の稼ゑて浮世よ砂の紙
作ゑみれ移ゑや納豆汁
立厩
雲移の星下とかるんあるとせめ
角寺れ紙子もむ失ゑ月ゑ弓
朝嵐馬の目ゑ月頭巾汁
雲ゑゑゑ桂の花れ七日市

宿僧房

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

人の毒むしとなりしを

警蓼北[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

夜眞引　論人犬や[illegible]山

犬引て[illegible]

荒一[illegible]

[illegible]世市川三[illegible]

[illegible]

夜学感

警[illegible]

[illegible]

月小酒賣不許入内とぞ
さわりしと
ゑ宗の御ものとぞ
嘶むきやゑ
明神ゑ
貞徳翁五十年忌元禄十五
年壬午霜月十五日懐旧乃
ゑを述侍る
昔とゝも花橘のむしろ哉
霜月廿七為侯于黄門光国

卿之法系亭題ス周山之佳景
一 ひわの法系屋
ゑ書ほをつしまふけまふ言
田の寺山ゑとゝ
ゑ北ユミ破船法系屋
二 清水寺高ほ
横結会物や千とゝの高さ
六角堂孔子堂小町ゑ塔
ゑんとわしむすく物を也
三 耕作の法系屋

[illegible]

根岸ひくく[illegible]

四里木はれ山茶屋　けたすゝ弁
[illegible]

我や[illegible]牛より[illegible]

五反田　[illegible]

反蕎や[illegible]

六西行堂　[illegible]

[illegible]

炭や岩間こかし[illegible]

七唐橋　[illegible]

[illegible]

出橋や[illegible]

八八たちの所はなれをうきを取て
坊を新月中も所より伊川を
九河原書院をたづねて中古後
をたづねての賀
八千代とて河原中鍛冶法ようう
十西湖たちはいとはの中亭
より入て行月を望むてりく
美よ毎夕家にて西湖にあ
ふとたち東坡うとうを次て
詩をあらたむ重九行小和
漢

右十事
系北巡右炭の三人を院右
松風や炉より冨士を西屋形
俗より絵て一炉の数系乳傳
般
事なら般ける みとり衣
鉄鉢のうに ちやうと け
をとりていよ みて般の面
竹人ものも松に河豚といな
般ふうす般を重の般

文略す

[illegible]きとゝぬく粟汁

飯餘をかりさ[illegible]尺[illegible]と厨(クリヤ)ふ

[illegible]ひとゝ[illegible]ハ[illegible]と学鰹

[illegible]

[illegible]の[illegible]や犬の面[illegible]枝[illegible]垣

[illegible]を[illegible]ふ[illegible]や[illegible]

[illegible]作[illegible]り[illegible]佛[illegible]沢の[illegible]

文墨す

[illegible]塚の[illegible]と[illegible]と[illegible]と女

[illegible]

[illegible]の[illegible]し[illegible]や[illegible]皮

[illegible]の畑[illegible]ひやかし[illegible]

[illegible]製を[illegible]前[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]日い声[illegible]

[illegible]麦[illegible]麦[illegible]の[illegible]

[illegible]麦[illegible]

[illegible]

なにがしの詩さへて盡今の霊婚ハ
たゞ霊子此小便も何如って
抜出して霊らの掛ノ柄袋
霊折もし経新の掛菜はみなきれ捐
秘蔵の鶴れ残るをおしめ
家人下
墨染に衛甲や霊の
朝またや月霊殿さ酒の味
霊に向へたらば蘇鉄の女郎
秋すへ昨夜の菊と麦畑

橋寒

まことの遠精も消し霊験
伊勢絹をみせてまさに和
読たての歌

頼まれし　暁の一声に
知らずまことて　たゞ川の
花ぞ見し奥　ことみちぬらせ
ことや銀杏　折まもの錦
おもしろや此　橋さし方
集されして　情けなき姫

世をおくりけしきの色
見れば人なるかなる
七十古来 稀なりと
やつこ五心 捨ころも
汚れかへん 捨こしき
あるなるさの 捨てやあ
凍死ぬ命の 焼や捨てき

漫成五倫

君臣有義

家の子為ると高ふ年忘

父子有親

能けや惜きさ 粮ゆを捨て

夫婦有別

涙くまめむし出ぬ 忘れ

長幼有序

稚き子の狼の子 ちとよ

朋友有信

君と我 焼よもをとゝす 忘ふを

大小の兵 元禄十丁巳年

大庭を 二四六八九 くさく 和歌を

為よりて此坊に来て昨を夢
　　丹町源の画讃
来るやうや口を出ずる閑毋
元日を祝ずやうなる長者作
長者は左の耳よりあるとぞ
　　左し胸よりをす
煙草や諸人のすゆる塗なり
来春の時節なる鶴は鳴
き今年の因なれば六十歳
　　酒債尋常往処有人生七十古来稀

詩あきんと年を貪欲酒債求
流行や手紙を居れば年の垢
年中の放下見へのうとれ書
豆をうれ高ければちるる笑ひ那
　　乾元の名か
長き根ぬけてくく近し得方丸
　　三種原物煙媚ぬ自画讃
今こそ小園十帝や思ふ外
流行年ぬあはせ世ふつくるくく
年紙や品業年ぬ伊油ひき

ちる紅葉までのとし 無望因乃
中り伊賀の者へおとひのかけ
なりぬるをわけてくるの山より
へくるやまと

西拾ふ箕の小文や年の暮

何事もし初傍らハいりおる句
をり給さもりんなるをすれさて
世の中をうけおろ

妖なり紙貧しき師走かな

大晦日福いりこらり年忘

清玄閣より破戸弓をとりへまで

誰ゆふとおしふ大鼓とし忘

折もしも戸板めえたし雛の殊

折年に喰咲むかしみとさ

聖代

霞めりて日まで年に大晦日

雑之部

十友の圖 画ハ略之

往昔異邦の佛澄禅師十
牛を寄して人間迷悟のうちを
あらはされし其書を探玄ほ
云て牛ハ声音妓有く又及
ともとてありふハ説ありしきた

多おゝ十及の家を画ゝ侍て
笑を万世よ孫すゝの晋 其角

尋 牛

やゝ老おいよの〻ゝ年月おぼゆ

呼 牛

よゝとゝるあゝ生命てもさゝみる

隠 牛

蛍老おい孫なよ恋乳の部り

貧 牛

仁条刺やゝ部ゝ〻ゝ年男

更 牛

小使も貧ふあゝる五月の郭

番 牛

ゝゝさゝ暁金傘をかゝゝ

無 牛

きゝゝゝ枕も床も蚊屋ゝ

羊 牛

何となゝゝ夜ゝゝ少ゝ

送 牛

さゝんゝの千ゝ俺ゝ花や嘉声

老牛

くるしまうとくの花も時分に

於冠里公名歌五之梅

老梅

老梅や其の潤へのうけちらく

紅花形のまゝ手ぬ草や梅の露

村雨れときゝしや弓根の松

凡蝶丸より官を清く堂後の

歌といふといゝまゝ女

三條縮よりして独りし口の結れ

一手はめくゝの名ふなりしまもり

志らしれ堪へいふしへの時

春よなりわりまる云絶へて

機といふ字のうきおまぜよ

拵ゆわりとて一町世話を申へ足て

子を捨てむあしく孫る親の発

今とりけくやしかまし

盆会

なき魂も三日はやるゝあいまと存

十日いやしんきさるゝあきの風

ひさしく会てつもり人のと
とまりつるふくさすさとるつ
すまとりとりなよ
馬嘉紙よこさくるきにとふみを
あらはひまくるる神
我兄と桃梅柳うすき酒
作のむくさ兎か成乃あけの

追加

あらずらや心を兄よ浮雲主
餘所り国梅くごま兎参しさう
天智天皇
寄おさむ入鹿の首ふ口海皮
美家紙家し清家よ鏡をかくる書
藤金ちく
山城の額の海北ありさう郎
画漬
餘多や義の月ふハよ聖山

妙法蓮華経

多くはなりやはの蓮花華経

雪荷亭の花瓶にまうく

所を知らるる源ありけり糸桜

自画讃

掉扇やさを紙千変化体合

囲よく大工百りむ枝の梅

九像飯作下向

傳奏ゆきとよりの八男さやを此内

法飯場小馬休めりう大根引

法師夏を先こうるさくと大根引

後州久能の別当さんさま

かして法師色つるりを

やしさや法師男の姿

旨延享四丁卯年秋八月全編校合

成

百萬吉原

京都書林　姉小路堀川東江入町　中川茂兵衛
東都書肆　日本橋通三町目　竹川藤兵衛板

左玉物兄